

工藤 雅文（一般財団法人 平成紫川会 小倉記念病院 心臓血管外科）

ドイツでの血管外科研修

2015年9月7日から14日までの間、Karlsruhe 市立病院血管外科（Prof. Martin Storck）

において臨床研修を経験させて頂いた。Karlsruhe は Frankfurt 空港から車で約1時間30分程に位置する南ドイツの街であった。人口30万人程度の街であり、今年で生誕300年を迎え、街中は大いに賑わっていた。

Karlsruhe 市立病院は敷地も非常に広く、外科の病棟は約100年前に建てられたもので、歴史を感じさせる雰囲気が強かった。初日から朝のカンファレンスに参加し、その日の手術の予定と今問題になっている患者の治療方針等を話し合った。9時前から手術が開始され、さすがに最初は見学だろうなと思っていたが、最初から助手として参加させて頂いた。

最初に戸惑ったのは、手洗いのやり方であった。日本では当たり前と思っていたが、ここでは水の蛇口もイソジンも自動ではなかった。60歳前後であろうベテラン看護師に自分の肘で水とイソジンをコントロールすることを教わった。手術は右大腿動脈-右膝窩動脈バイパス術であった。この血管外科では電気メスはあまり使用しない印象を抱いた。最低限の止血に関してはバイポーラーを使用するが、剥離等で電気メスはほとんど使用しなかった。そのため剥離のほとんどをハサミで行うわけだが、その技術が非常に美しかった。例えば、血管を露出する際や内膜除去を行う際も、綺麗に層を同定し、丁寧に剥離を行っていた。自分は手術の基本が全然備わっていないことを痛感した。そのような丁寧な手技を見たかと思うと、動脈を遮断する際は、意外と大胆であった。CTでも触診でも石灰化でガチガチな動脈をためらいもなく遮断していた。それで問題ないなら問題ないのであろう。

手術の種類は、下肢の動脈バイパス術に加え、動静脈シャント作成や内頸動脈の狭窄に対する形成術が大半を占めた。毎日3-5例ほどあり、毎日参加させて頂いた。

Martin Storck 教授とは今回が初対面であった。彼には本当によく面倒をみて頂いた。夕食に何度も誘って下さり、ドイツのことを沢山教えて頂いた。ビールは多くの種類があり、味もさっぱりしたものから、芳醇なものまで多様であった。私は、Pils が大変気に入って、好んで注文した。Weizen は多少癖があったが美味しかった。また、Martin 教授がおっしゃるには“Good surgeon is good eater.”らしい。それに従っていたら、ドイツ滞在中は食欲旺盛であり、肥えてしまった。

最終日には Heidelberg を訪れた。Heidelberg にはドイツで最も歴史のある大学があり、その周辺には美しい古城街道、ライン川の支流であるネッカー川と Heidelberg 城

が存在する。また、近くには哲学者の道と称される小径があり、ゲーテをはじめとする多くの哲学者や詩人が過去に思いを巡らせながら歩いたという。そのベンチに座り、美しい風景を眺めながら、今自分が置かれている状況と、外科医として何を目指し、そのためには何を今しなくてはならないのか考えた。

今回は1週間という短い期間であったが、とても有意義な時間を過ごすことができたことに感謝致します。

まず、ドイツでの手術を自分の目で確認できたことである。

特に剥離を行うにあたり、層を意識することの重要性を知ることができた。

また、今の自分の立ち位置と、普段見失いがちな目標の再確認を行うことができた。

何より **Storck** 教授をはじめ、ドイツで関わった人達と繋がりができたことが大変嬉しく思う。研修先を紹介してくださった弘前大学胸部心臓血管外科 福田幾夫教授には大変感謝致します。

